

## シカゴ ASEEES (主に夜の部) レポート

2022年12月3日

タルトゥ大学/ウクライナ研究会(末席)会員

保坂三四郎

11月半ば、私は、米国シカゴで、夢にまで見た NBA シカゴ・ブルズ戦を観戦していた。だがコートには、ジョーダンどころか、ピッツペンも、ロッドマンも、B.J.アームストロングもクローチもない。ていうか、私の知っている選手はひとりもない。まったく別のチームになっている。ホームスタジアム United Center に来てからおかしいなと思い検索する。日本で NBA ブームが起り、ブルズが「スリーポイント」(3連覇)を達成、バルセロナ五輪の「ドリームチーム」が世界に衝撃を与えたのは、1992年(私が中学生の頃)だった……

シカゴに来たのは、別の目的があった。博士課程の同僚に勧められて初参加した ASEEES という学会だ。ASEEES が「スラブ・東欧・ユーラシア学会 (the Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies)」の略称であると知ったのは学会が終わってから。NBA よりも長いアルファベットの略語は覚えられない(いまだに違いがよく分からないが、「I」から始まる似たような学会 (ICEESS) もある。S と E の数が微妙に違ったりして紛らわしい)。

今回、ASEEES のテーマは、“Precarity”。私の語彙にはない単語なのでググる。先行きの見えない不安定さのような意味らしい。2月に始まったロシアのウクライナ全面侵攻は、これらの地域を専門とする研究者や学生にも大きな衝撃を与えた。このメモは、そのような precarious な状態に置かれた研究や学習が今後どこへ向かうのか、私が ASEEES (の主に夜の部) で見聞きしたことをもとに感想をつづったものである。

### ビール 8 ドルの衝撃

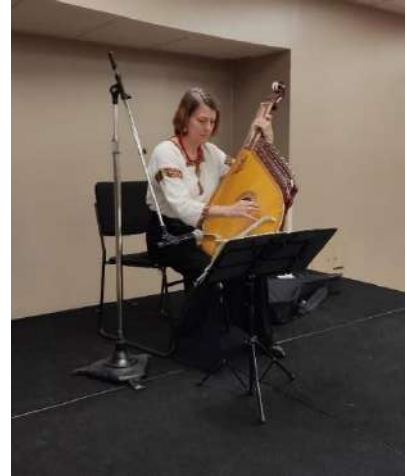
学会は 11 月 10~13 日の 4 日間にわたりシカゴ市内の The Palmer House Hilton ホテルで開催された。個人発表の abstract はたしか 3 月締切で、運よく採用されたので発表 2 週間前までにはワーキングペーパーを作成し、討論者に送った。<sup>1</sup>だがあろうことか、開催 1 週間前に主催者から、私のセッションは司会と討論者がそろって急用で参加できなくなり代わりに引き受けてくれる人も見つからないので 4 名の発表者間で勝手に討論してください、という知らせが届いた。

---

<sup>1</sup> 冷戦期に、英語堪能で欧米的と見なされたソ連の学者(のちに KGB エージェントと判明)の Georgii Arbatov が、Marshall Shulman など米国のソ連学者・軍縮専門家をどう籠絡したかを KGB のマニュアルなどを参照して書いたペーパー“Epistemic Communities versus ‘Agents of Influence’”を発表。よほどつまらない発表だったんだろう。だれもコメントくれなかったが、唯一、米露軍縮交渉に参加したという Robert Freedman (今はロシアの中東政策を研究) から、たしかに Shulman はナイーブだった等の感想いただく。

[https://www.researchgate.net/publication/365276433\\_Epistemic\\_Communities\\_versus\\_Agents\\_of\\_Influence](https://www.researchgate.net/publication/365276433_Epistemic_Communities_versus_Agents_of_Influence)

ちょい落胆。でもまあいい。こういう会議は、発表よりもなによりも夜の部に参加することに意義がある。初日 17 時過ぎから歓迎レセプション (& 出版社ブース紹介) が始まる。と思ったら、会場入口で、ガムとチップスとひまわりの種(ウクライナ応援の意味だろうか) の入った小袋を渡され、「飲み物はあっちで券を買ってください」とのこと。まあ、しょうがない、ワインでも頼むかと思っただが、グラス 1 杯 12 ドル (1600 円)、スーパーで 2 ドル位で売っているビール小瓶も 8 ドル (1000 円)。ひえー、高いとは聞いていたが。こっそり持ち込めばよかったと後悔しつつ、しょうがないので一番安いビールを買ってチビチビやりながら、出版社ブースを回って冷やかす。なお、レセプションでは、シカゴ生まれの Motria Caudill さん (本業は Environmental Health Scientist とのこと) がバンドゥーラ演奏を披露してくれた (日本のバンドゥーラ奏者の Gudzii 姉妹を知っていた)。



### こんなに早く

ハーバード大学ウクライナ研究所 (出版) は二つブースを出していた。担当者に、所長の Serhii Plokyh (私もパネリストとして参加した 10 月の ASEES オンライン学会のラウンドテーブル” 100 Years of the USSR: How Do We Perceive and Remember the Soviet Time?”のチェアをやってくれた) はどこ? って聞いていたら、本人がのそっと背後から現れた。歴史家のセルヒーと初めて会ったのは 2019 年にキエフで、セルヒーが KGB アーカイブを利用したチェルノブイリ原発事故に関する新刊<sup>2</sup>のウクライナ語版出版記念イベントをやったときだ。当時、この本の英語版のタイトルは”Chernobyl”だったので、キエフの聴衆の一人からなぜタイトルがウクライナ語の”Chornobyl”でないのだ、という質問が出た (e と o の違いに細かいこと言うなあとは思った)。セルヒーは、世界的にはロシア語読みの「チェルノブイリ」で知られていて「チョルノブイリ」で検索してもヒットしない、いずれはウクライナ語にしたいが今は「チェルノブイリ」にせざるを得ないのだ、と出版業界の大人の事情を説明して聴衆の理解を求めている。このことを覚えていたので、セルヒーに、日本は春以降、政府や主要メディアは「キーウ」と「チョルノブイリ」にシフトしたよ、と言ったら目を丸くして驚いていた。こんなに早く「チョルノブイリ」になるとは夢にも思わなかっただろう (訂正: 正しい表記は「チョルノービリ」だそうで・・・)。

### ハナキン

2 日目の夜、プログラムを見たらサイドイベントで、米国ウクライナ学会 (The American Association for Ukrainian Studies : AAUS)<sup>3</sup>の総会をやっていたので潜入した (普段から知らないス

<sup>2</sup> Serhii Plokyh, *Chernobyl: The History of a Nuclear Catastrophe*, First edition (New York: Basic Books, 2018).

<sup>3</sup> <https://ukrainianstudies.org/>

ナックなどへの潜入は得意)。50人位の部屋は満室。総会は、コロナ以来、初めての対面開催らしく、春に出したロシア全面侵攻への抗議声明の説明、予算、次期役員決め、ウクライナ関連本や翻訳本の奨励賞やその選考委員決めなど、Paul D'Anieri 副会長が早口の英語（なんか独特の訛りがある気がする）でさくさく進める（Oxana Shevel 会長は都合により欠席）。その後、自由討論に。会員から、ウクライナ学会としてもっと情報発信をすべき、という意見。私の隣に座っていた人は、カナダ・ウクライナ学会の人で、やっぱり同様の意見を言っていた。その関連で、Serhii Plokyh から翌日の "Vice-Presidential Roundtable: Decolonizing and De-Centering Russian Studies" についてアナウンス。そんなこんなで、1時間位経ったのを見たポールが、「難しい話は明日のセルヒーのラウンドテーブルに任せるとして、みんな忘れてないか、今夜はフライデー・ナイトだぜ！これからシェフチェンコ科学協会のレセプションだぜ！」と締めた。

気が付くと、隣の部屋にはバーカウンターがセットされ、つまみも用意されていた。初日の件もあったので、バーテンダーに恐る恐る「チケットどこで売っているの？」って聞くと "Free" との答え。ラッキー。やはり無料だと他の参加者もみんなここぞとばかりに飲みまくる。気前のよいシェフチェンコ（科学協会）に心から感謝。<sup>4</sup>

レセプションでは、すっかりハナキン気分のポールをつかまえて、ロシア全面侵攻前後の日本の状況について話した（ポールとは近日刊行予定の *Russian Disinformation and Western Scholarship*<sup>5</sup> のつながりでメールでだけやりとりはしていた）。私からポールへは、春以降、日本ではテレビをつければウクライナ研究会の会長か副会長のどちらかが出てウクライナで起きていること（ロシアの全面侵攻）を解説している、欧州政治や安全保障・軍事専門家も多く発信した、2014年のようにヴァルダイ会議メンバーを始めとするロシア専門家が情報空間を独占して「なんだかんだ言ってクリミアは歴史的に見るとロシアだ」とか、「ウクライナ暫定政権は極右ネオナチだ」とかモスクワ発のプロパガンダや陰謀論を好き勝手に広めることはできなかった、そういう意味ではやっとうクライナの視点が受入れられつつある、と話した。一方、ポールによれば、米国ウクライナ学会はメディア関係者との関係構築がまだあまり進んでいないようで、ポール自身は何度かテレビに呼ばれたが、そもそもウクライナどころかロシアの専門家でもないストラテジストや地政学論者のような人々が主要なコメンテーターになっている、とのこと。

レセプション後半、いつもビシッと細身のスーツと眼鏡がかっこいい ASEES 次期会長の Vitaly Chernetsky（ロシア・ウクライナ文学、スラブ文化）を見つけた。ヴィタリーは、6月の Tartu Conference で基調講演 "Confronting Epistemic Injustice: Ukraine as a Challenge to Our Field" をやってくれたの

---

<sup>4</sup> <https://shevchenko.org/> 19世紀後半にハブスブルク支配下のレンベルク（今のリヴィウ）に設立されたウクライナ語振興の組織（帝政ロシア支配下ではウクライナ語出版はほぼ禁止されていた）で、辞典の編纂などを行っているらしい。← ウィキペディアの知識。

<sup>5</sup> Taras Kuzio, *Russian Disinformation and Western Scholarship* (ibidem Press, Forthcoming), <https://cup.columbia.edu/book/russian-disinformation-and-western-scholarship/9783838216850>.

で、会うのはそのとき以来。<sup>6</sup>そのときも同じ話したよなと思いつつも、日本ではウクライナ研究会の会長が、戦間期のウクライナ歌劇団の日本公演、極東での OUN と日本の情報機関の接触、戦後のノリリスク蜂起など、モスクワ視点のソ連・ロシア史研究がほとんど注意を払ってこなかった日・ウクライナ関係史を掘り起こし、<sup>7</sup>ウクライナに関する”epistemic injustice”がようやく改善されつつある、ウクライナ語版も出てるし、英語版でも出るそうなので是非読んでみてほしい、とまるで自著のように得意げに宣伝した（←これマジでいい本。岡部会長から頼まれたわけではない）。

また、ヴィタリーも交え、全面侵攻の影響で現在プリンストン大学に籍を置くウクライナ科学アカデミー歴史学研究所の Yana Ponomarenko（「大祖国戦争」の批判的研究で知られる）ともいろいろ話げできた。ヤーナは、今年立ち上げられたポーランド拠点の査読誌 *AREI: Journal for Central and Eastern European History and Politics* の managing editor をやっている。Editorial Board には私のロシア人の同僚 Igor Gretsky もおり、中欧だけでなくロシアも視野に入れているなかなか面白い雑誌だ。<sup>8</sup> そういえば、ヤーナやヴィタリー、その他シカゴで出会った方々に新潟のカヤック漁師の思いが込められたウクライナ応援バッジを配った。みんなとても驚き、喜んでた。

遡ること1週間前、11月初旬、日本のロシア東欧学会に参加するため新潟にいた。時差ぼけで寝られず、深夜1時過ぎ、古町（美川憲一「新潟ブルース」参照）に繰り出した。寝静まったソープ街から一本入った小道。深夜の闇の中、小さな漁師居酒屋の灯りだけがついている。ガラガラ。次の日の仕込み中だったマスターが仕事の手を休め、「飲むならどうぞ」と快く迎えてくれる。二人だけで四方山話。なにかの拍子に話題がウクライナになると、マスターは何も言わずキッチンの奥に何かを取りに行き、カウンターの釣り道具の横にそれを置いた。それは、”We stand always with the Ukrainian people”と印字された青と黄のバッジだった。2月24日のロシアの全面侵攻を見て居ても立っても居られなくなり、このバッジを6千個も作り関係者に配って募金を募ったという。元免疫学者だけあって内因性と外因性の区別がしっかりしていて、ウクライナは、シリアのような外部介入を伴う内戦ではなく、ロシアによる侵攻だ、と問題を正確に理解していた。

2月以降の日本での圧倒的なウクライナ発情報や、草の根レベルでのウクライナ支援は、他の欧米諸国と比べても高いレベルにあり、米国やカナダのウクライナ学会関係者もみんな興味津々だった。ポールもセルヒーも来年、来日の計画があるそうなので日本のウクライナ研究会に招待したら面白いかもしれない。



シカゴで大人気！

<sup>6</sup> Vitaly Chernetsky, “Confronting Epistemic Injustice: Ukraine as a Challenge to Our Field,” UTTV, December 6, 2022, <https://www.uttv.ee/naita?id=33347&keel=eng>.

<sup>7</sup> 岡部芳彦, *日本・ウクライナ交流史 1915-1937年* (神戸: 神戸学院大学出版会, 2021); 岡部芳彦, *日本・ウクライナ交流史 1937-1953年* (神戸: 神戸学院大学出版会, 2022).

<sup>8</sup> 創刊号はウェブで公開している。 <http://www.arei-journal.pl/webroot/upload/files/ISSUES/AREI%20nr1-2022%20NET.pdf>

## ロシア研究を decolonize できるか

3 日目、ASEEES 副会長 Juliet Johnson (McGill U, Canada) の司会で "Decolonizing and De-Centering Russian Studies" ラウンドテーブルが開催された。これは、ロシアのウクライナ全面侵攻を受けて研究者が考えなければならないタイムリーで重要なテーマであり（私は、ポールや、Taras Kuzio と数年前からこのテーマで論文集を準備している）、来年 2023 年の ASEEES のテーマ "Decolonization" の準備の一環として企画された。<sup>9</sup>

だが、結論から言えば、かなり物足りない内容だった。セルヒー (Plokhy) は、歴史家の視点から、最近ようやく 12 巻の英訳が完成した Mykhailo Hrushevsky (歴史家で中央ラーダ議長) の *History of Ukraine-Rus'* (『ウクライナ＝ルーシの歴史』)<sup>10</sup> を始めとして、ウクライナ研究がロシア研究に新たな視点をもたらす、と指摘した。他方、セルヒー以外の 4 名（見たところほぼ米国の学者）は、ロシア国境の少数民族への視点（2000 年代初頭に Alexander Etkind などがしていたロシア自身が植民地化された犠牲者であるという "internal colonization" に類似する議論）、decolonization の定義、ロシアの研究対象へのアクセスの問題、cultural racism (シカゴという土地柄もあり、これとは別途 "Black Scholars talk about Russia" というセッションもあった)、アルバニアなど旧共産主義国での racism など、ウクライナ侵攻の影響とはあまり関係のない次元の話をしていった。アルバータ大学のカナダ・ウクライナ研究所所長 Natalia Khanenko-Friesen は、パネリストに対し、ロシア研究とウクライナを含む「その他の国」の研究の不均衡（ロシア中心主義）が問題であるのにどうしてこの最も大事な問題が議論されないのかと疑問を呈し、イベント終了後、私に "There was a huge elephant in the room" と述べていた。シカゴに滞在し、こうした議論を聞いていて、米国の研究者は、難民問題含めロシア全面侵攻の影響を身近で感じる欧州（特にウクライナに近いバルト・東欧諸国）ほどにショックは受けていない、むしろロシア渡航、露側カウンターパートや資料へのアクセスが難しくなることから従来の研究が継続できるかばかりを心配している、との印象を受けた。ロシア研究のリセットは、米国よりも欧州の学者の間から始まるだろう。<sup>11</sup>

## どこへ留学する？

日本でこの春にロシアの文学なり音楽なりに憧れを抱いてロシア語学科に入学した大学一年生は、コロナの制約に加え、ロシア軍による殺戮を毎日テレビで見ると動揺していると聞いた。ロシア全面侵攻は、ロシアとの学術交流や留学にも大きな影響を与えている。

米国は、世界諸国から相互理解や人物交流のためフルブライト奨学生を受け入れている。フルブラ

---

<sup>9</sup> 11 月下旬から、*Post-Soviet Affairs* 誌でもロシアの全面侵攻を受けたロシア研究の見直し特集が始まっている。

<sup>10</sup> <https://www.ciuspress.com/product/history-of-ukraine-rus-subscription/?v=a57b8491d1d8>

<sup>11</sup> 例えば、11 月末、タルトゥ大学は、ベルギーのアントワープ大学との共催で、ロシアの全面侵攻とウクライナの主体性 (agency) を議論するワークショップを開催した。 <https://skytte.ut.ee/en/content/russias-wars-power-and-agency-times-crisis-and-exceptions>

イト・プログラムのブースで担当者に聞いたところ、2月の全面侵攻以降もロシアからの受け入れは継続しているという。なんでも、ここ数年、フルブライトはロシアで活動を許されていないので奨学生候補との面談は第三国の米国大使館でやっているらしい。ケースバイケースらしいが、ジョージアやアルメニアとかその辺の国のようだ。私の所属するタルトゥ大学は、全面侵攻開始後すぐに、政府が方針出すよりも先に、ウクライナ出身の学生と職員に対する全面的支援と同時に、秋学期のロシア・ベラルーシからの学生新規受入れ一時停止を決定した。それは、感情的な問題ではなくて、現実の問題として、大学側が、ロシアから来る学生一人ひとりの思想（学業以外の目的がないか）をチェックすることができないからである。<sup>12</sup> 一方、フルブライトは、米国に招聘したロシア人学生がロシア帰国後に米国のスパイであるかのように疑われることの方を問題と考えているようだった。

全面侵攻以降、米国政府も日本政府もロシア渡航を控えるように呼び掛けている。ソ連崩壊後も、情報機関と連携するロシアの「学術機関」に取り込まれる研究者や学生の事例は多いが、ロシア留学が安全上もハイリスクとなった今、ロシア語を勉強する学生はどこに留学するのか？従来からロシア語を教える大学や語学センターのあるキエフ（今は行けないが）、リガ、タリンなどロシア以外の選択肢もあった。ただ、今回目に止まったのは、ラトビア東部の都市 Daugavpils の”Learn Russian in the European Union”<sup>13</sup>のブースだ。代表の Sergey Simonov によると、会社は民間組織だが、ダウガフピルス大学ロシア・スラブ語学科と協力して、年間200名の外国人をロシア語コースに受け入れているという。このうち9割は米国人とのこと。コースは米国人向けに作られているので、日本人が来るようならばニーズに応じてカスタマイズしたいと述べていた（日本人は2000年代初頭に一人だけ受け入れた経験あるとのこと）。



私自身、数年前にダウガウピルスを旅行で訪れたが、この町はいい意味でも悪い意味でもロシアそのものだ。おそらく住民の9割以上が日常生活でロシア語を使っている（タタール語が話されているカザンとかよりロシア語使用率は高いかも）。2018年は、ラトビア建国100周年でリガの歴史博物館はラトビア独立へ向けた苦難の歴史を展示していたが、ダウガフピルス郷土史博物館はロシアの歴史プロパガンダ「大祖国戦争」など、ソ連時代の展示がかなりそのまま残っていた。また、本屋に行けば、ロシアの本屋と同じく西側の陰謀論についての本が平積み。若者はラトビア語とロシア語のバイリンガルも多いが、道端で会った中年の人とウクライナの話をしてところ、「2015年頃、ラトビア

<sup>12</sup>すでに在学中のロシア人学生には影響はおよばないが、この大学の措置に不満を持つ一部のロシア人学生とウクライナ人学生の間で論争があった。のちに、エストニアの防諜機関責任者も、入国するロシア人全員のロシア政府・情報機関との関係調査や監視は不可能との見方を示した（ロシアは、エストニアの100倍以上の人口）。実際に、タルトゥ大学の修士課程を終えたロシア人で、1940年のソ連による違法なエストニア併合（2014年にロシアがウクライナ領クリミアに対してやったのと同じで軍事侵攻、破壊工作、偽「住民投票」を組み合わせた）などなく、エストニアは「自発的」にソ連に加入した、というロシアの歴史捏造・宣伝工作に加担している者がいる。

<sup>13</sup> <https://www.learnrussianineu.com/>

のファシスト軍もロシア語を話すダウガピルスを包囲して突入しようとしたのよ」というトンデモ陰謀論を展開していたのを覚えている・・・

ちなみに、米国の大学のロシア語教師によれば、近年のロシア語研修先はカザフスタン、アルメニア、ジョージアに軸足を移しつつあるとのこと。とくにアルマティは長年の経験から受け入れ体制が整っているが、いま学生が一齐に押しかけているのでキャパの問題が発生している。その点、アルメニアのエレバンは新しく教師の質もよいがロシアの国営放送が映るので留学する学生へのプロパガンダの影響が懸念されているらしい。

## ロシア・メディアの読み方を教える

その関連でいえば、今回、ASEEESで”Teaching Information Literacy in Russian in a Changing Media Environment”というラウンドテーブルがあった。ロシア・メディアを批判的に読むメディアリテラシーへの関心が徐々に高まりつつあり、試行錯誤が始まっている。例えば、ロシア語の文法がある程度終わり、記事を読めるようになる3年次を対象にロシア国営メディアと、欧米メディア（BBC等）や非国営メディア（Meduza等）の記事の比較やディスコース分析をやったりする。

(図) ディスコース分析の事例（提供：Susan C. Kresin,

### Trope of “Expansion of NATO to the East, Russia under increasing threat from the West”

vs. NATO as an opportunity

- Чем отличаются эти карты?
- В чём они похожи?

*Teach students to examine the visuals before they begin to read so they are aware of potential biases*

### Close reading: language and linguistic structures

24 февраля 2022, 07:25 Армия

#### Специальная военная операция России в Донбассе. Хроника первого дня

Путин объявил о начале военной операции в Донбассе

- слышны взрывы
- Они доносятся из воинских частей ВСУ

Word order; adjective vs. verb; voice  
Lack of human agency  
*but blame on Ukraine armed forces as a possible source*

- По предварительным данным as a characteristic of **активные меры**

Президент РФ Владимир Путин ранним утром 24 февраля объявил о проведении специальной военной операции в Донбассе. По его словам, военные действия направлены против тех, кто призвал Украину и ее народ в заложники. В Киеве, Харькове, Одессе и других крупных городах страны слышны взрывы. По предварительным данным, они доносятся из воинских частей ВСУ. «Газета.Ру» ведет онлайн-трансляцию.

野次馬の私は、プーシキンの詩の暗唱の前にこっちの方がはるかに大事、これやらなかったら大学のロシア語学科は”a factory of useful idiots”になる、とコメントした。一方、学部生向けのロシアの

歴史・文化コースは相変わらずロシア中心の内容のようだ。ある米国人の先生が、ウクライナの Heorhii Kasianov の memory war の議論も入れていると話していたが、これも私から、Kasianov はユーロマイダン以降のウクライナ国民史の動きを nationalistic だと批判して逆にロシアの宣伝イベントに利用されている、<sup>14</sup> 面白いことにロシアの歴史はウクライナの歴史家（レセプションで会った Yana Ponomarenko 等）の方がはるかに深く知っている、ロシア史は隣国（ウクライナ、バルト三国など）の視点を入れないと学生の理解が著しく偏ったものになる旨コメントした。

UCLA でロシア語・チェコ語を教える Susan C. Kresin は、最近 active measures 関連論文を読み始めたと言っていた。スーザンのようにもともとインテリジェンス研究からは遠い文学部の先生の意識が変わり始めたことはよいことだ。ロシアの disinformation に関する知識は、逆説的だがこのトピックに関心のない人ほど必要だ。といっても、スーザンによれば、このような試みは米国で始まったばかりでまだあまり仲間もいないようだ。

### ウクライナ村

シカゴでは、ウクライナの旗をバルト三国ほどに見かけることはない。ただ、ひとつの例外は、シカゴ西部にある Ukrainian Village と呼ばれる地区である。当初、このエリアには、ドイツやポーランドの移民が住んでいたが、19 世紀末から 20 世紀初頭に來たのがウクライナ系であった。玄関にウクライナ国旗を掲げた住宅も多く、教会、文化センター、美術館、学校、カフェ "Old Lviv" から、"Самопоміч" という名の金融機関まである。



<sup>14</sup> なお、Kasianov は、ロシアの全面侵攻以後、やっと目が覚めたようで、自らが批判していた「愛国的」歴史家にポジションを変えつつある。Georgiy Kasianov, "The War Over Ukrainian Identity," May 4, 2022, <https://www.foreignaffairs.com/articles/ukraine/2022-05-04/war-over-ukrainian-identity>. Kasianov については、Olga Bertelsen (Tiffin University, Ohio)が Kuzio, *Russian Disinformation and Western Scholarship*. で論じる予定。



この地区にあるウクライナ国民博物館 (Ukrainian National Museum) を訪ねた (開館日は木曜から日曜)。<sup>15</sup> 1952年に設置され、1階は主にウクライナ移民史、2階はウクライナ史と資料室、3階はウクライナ系米軍人・政治家に関する展示がある。これより前、10月にたまたま立ち寄ったリトアニアのカウナスの戦争博物館で、ウクライナ解放戦争 (1917~21年) のウクライナ陸海軍の制服や旗のデザイン原画展をやっていた。スタンフォードやニューヨークのウクライナ博物館の他、このシカゴの博物館のコレクションも貸し出されていた。<sup>16</sup> アポなしだったが、見るからに怪しげな日本人 (最初カザフ人と思っただけ) の訪問を博物館関係者は歓迎してくれて、閉館時間過ぎても1時間以上話し込んでしまった。数日前にも、シカゴのポーランド・ウクライナ共催の慈善行事で、ポーランド外交官に対し「ポーランドにミサイル打ちこむウクライナとは関係見直した方がいいんじゃない」と発言したロシア系 provocateur がいたので、博物館 curator の Maria は、「あなたはプーチンの秘書ですか？」って切り返したらしい (笑)。なお、ここでも岡部会長の『日・ウクライナ交流史』を勝手にセールスして、特に2月以降の日本のウクライナ研究会の存在感について熱く語った (末席会員の私はなんもしてないけどね)。

お土産にけっこう貴重な本 *В р'ядах УПА* まで頂いた (ネットで読めますが、ウクライナ研究会会員の UPA ファンに差し上げます)。近くのバブでパラパラめくってみたが、赤軍が「ポーランド領主から解放」するためウクライナ西部ヴォルィーニ地方の村に入った際の村人とのやりとりの記述は面白い。露兵「おまえらいったい何者だ？」村人「この村のウクライナ人です」露兵「なんでそんなよい格好してるんだ？」村人「だって今日はネジェーリャ (日曜日) です」露兵「なにがネジェーリャ (週) だと!? 富農め!!」スラブ系言語で nedilia を「週」の意味で使うのはロシア語しかない (よね?)。



Найменший з вершників, зі закульбаченим і віспою переораним носом, зачіпливо питає: „А што у вас севодня вихадной?” Одначе ніхто не розуміє. Люди низують плечима і шось шепчуть між собою. „А хто ви такіє?” - падає вже гостріший запит. З гурту відповідає один господар: „Ми селяни, українці”. „А пачему так харашо одети, пачему не работаете?” „Та ж сьгодні неділя”, — відізався знову хтось з гурту. „Какая неделя?! Куркулі!! Разойдісь!” гримнув якийсь старший. Люди слово „разойдісь” зрозуміли і, приголомшені, з похиленими головами, почали поволі розходитись.

19

## シカゴ万博

シカゴがウクライナにとって特別な場所であるのは、1933年のシカゴ万博も関係している。当時、米国ルーズヴェルト政権は、アジアにおける日本の拡張主義に対抗するため、ロシア革命以来認めてこなかったポリシェヴィキのソ連 (帝政ロシアの借金を踏み倒し、国際約束も継承せず、米国資産を

<sup>15</sup> <https://ukrainiannationalmuseum.org/>

<sup>16</sup> <https://www.vdkaromuziejus.lt/atidaroma-unikali-paroda-amzinai-laisva-ukraina/> このカウナスの展示は、ウクライナ陸海軍が部隊 (Чорні запорожці、ザポリツジャのコサック部隊など) や階級に応じて制服のボタンまでかなり細かいルールがあったことなど、一見の価値ある。

没収) に対する外交方針を転換し、国家承認のための交渉を進めていた。このときソ連側の交渉担当者だったマクシム・リトヴィノフ外務人民委員 (のちに駐米大使) は、ウクライナがソ連館に展示されることを理由に独立したウクライナ館の建設に反対した。また、当時ウクライナ西部を支配していたポーランドも同様の理由から反対した。しかし、米国、カナダ、ブラジル、アルゼンチンのウクライナ人コミュニティは大規模な募金活動を展開し (寄付のビラにはソ連よりポーランドへのライバル心が強く出ていた)、1933年にウクライナ館が建設された。他の国のパビリオンは自国政府が金を出していたが、ウクライナ館だけは世界中のウクライナ人や支援者の寄付だけで作られた。万博期間中、フーヴァー前大統領を含む180万人がウクライナ館を訪問し、ウクライナの芸能、料理、工芸、芸術、農産物が紹介された。このパビリオン建設に見えるウクライナ人の自由と独立への執念は、訪問者の驚嘆を呼んだという。折しも、世界は大恐慌、ウクライナではスターリンによるホロドモールで何百万のウクライナ人が飢餓で絶命していた。



シカゴ万博ウクライナ館

### 30年

ASEEESでは、"The Persistence of the 'Post-Soviet Space'"というラウンドテーブルが予定されていたが、開始時刻になっても始まらない。隣で話し込んでいる二人の学者に聞くと、中止になったのだろうとのこと。<sup>17</sup>ASEEESのプログラムを"post-Soviet"で検索するとセッション等のタイトルで54件がヒットする。"post-Soviet Russia"のような使われ方が主だが、"post-Soviet space"のように地域としても使われる(10件)。全く異なる道を歩んでいるウクライナ、タジキスタン、エストニア(ソ連が占領)を"post-Soviet space"で括って議論するのは無理がある一方、複数の国をまとめる便利さから使われ続けていることも事実。しかし、ミニソ連復活を目指すプーチンも「旧ソ連圏」の枠組みで思考している。モスクワ支配の暗喩として"post-Soviet"を使っていないか気を付ける必要があるね。

ソ連は、ジョーダンのシカゴ・ブルズがNBA初制覇した1991年に崩壊した。それから30年。第4クォーター残り5分、ブルズがかつて弱小だったデンバー・ナゲッツにホームで20点差をつけられているのを見て、私は一人だけタイムマシンに乗ってきたような孤独感とともに席を立った。<sup>18</sup>

<sup>17</sup> この二人は、「どうしてメディアは米英がアフガニスタンでやったことを報道しないの？それに従えば、ロシアが[ウクライナで]やっていることはexcusableだ(許される)」、「そうだ、NATO拡大が問題だ」という耳を疑うような議論をしていた。「反覇権主義」に名前を変えただけの「打倒米帝」思想が一部の学者の間で亡霊のように生き続けている。新潟のマスターから戦争の因果関係を教えてやってほしいものだ。

<sup>18</sup> 謝意：私のASEEES参加は、European Regional Development Fundのグラントで実現しました。

オマケ：

シカゴは、クリスマスへ向けて街中がライトアップされていた。もうすぐクリスマスキャロルが聞こえてくる時期だ。北米の定番クリスマスキャロル、“Carol of the Bells” で知られる“Schedryk”はもともとはウクライナ民謡で、1920年代から30年代前半にかけて、さまざまなウクライナの歌劇団やバンドが全米各地でコンサートを開催した（たしか岡部会長が神戸に来たウクライナ歌劇団についても書いていたね）。この頃は、今よりもみんなウクライナのことをよく知っていた。そういう意味ではやっと我々のウクライナについての知識が100年前のレベルに戻りつつあるということかもね。Schedryk のアニメ付きバージョンはこちら。<sup>19</sup>



（上下）シカゴを訪問したウクライナのウクライナ歌劇団やブラスバンド（右上のチラシ” Пропаганда Української Пісні Між Американцями”と「プロバганда」がニュートラルに使われているところ面白い）



<sup>19</sup> Oleg Skrypka, *Олег Скрипка — Щедрик [Official Video]*, 2012, <https://www.youtube.com/watch?v=NZyAPNDS3W0>.